

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**

**大学院学生研究**

**2018年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究 異文化コミュニケーション科		
<b>研究代表者</b> (2019年3月現在のもの記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年・18WV001H		村松 直子 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	異文化コミュニケーション研究科・教授		高橋 里美 教授 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	日本語・英語談話分析タスクを用いた語用論指導が学びに与える影響のデータ収集と分析		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程1年		村松 直子
<b>研究期間</b>	2018 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

日本の教育政策では英語コミュニケーション能力の育成が喫緊の課題となっている。一方で、英語教育では社会言語能力の育成が不足していることが国内外の研究者により指摘されている。本研究では、英語社会言語能力、談話能力、「異文化間能力」を向上させる指導プランとして、大学英語科目において「日本語・英語の談話分析タスクを用いた語用論指導」を行い、同指導が上記諸能力向上に貢献し得るか、質問紙調査、roleplay、インタビュー等により調査、考察した。併せて、質問紙調査、自由記述、roleplay、インタビューで収集したデータを分析することにより現代の日本人大学生の人間関係、特に上下関係についての認識と配慮の在り方、言葉の使い分けを明らかにした。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 語用論指導 ] [ 談話分析 ] [ 相互行為の社会言語学 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 1. 研究の概要

文部科学省は 2014 年に「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(英語教育の在り方に関する有識者会議)を公表した。その中で、「我が国の英語教育では、現行の学習指導要領を受けた進展も見られるが、特にコミュニケーション能力の育成について改善を加速化すべき課題も多い」と述べられている。一方で、村田(泰)(2015)は高校検定教科書 8 冊を調査したところ、殆どで address form、emphatic response、joke のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが限定的にしか扱われていないと報告し、村田(和)(2015)は、高校検定教科書 15 冊を調査して、不同意表現の指導は 6 冊にあるが、いずれもポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを教える視点が入り入れられておらず、ポライトネスを習得できないであろうと述べている。

本研究では、そのような現状を踏まえて、従来行われていない「談話分析」を用いた語用論指導のデザインを考案し、同指導が学習者の語用論に対する気づきや語用論的能力に貢献し得るか、質問紙調査、roleplay、インタビュー等により検証考察した。同指導では、学習者がコミュニケーションの対人関係上の機能(Brown & Yule, 1983)とポライトネス(Brown & Levinson, 1987)の視点を持てるように配慮した。具体的な指導項目は「断り」のスピーチ・アクトであった。

## 2. 「談話分析を用いた語用論指導」デザインの効果

「談話分析を用いた語用論指導」デザインの効果として、受講生が自分たちの英語発話の量的データを英語母語話者のそれと対照分析するなかで、英語発話ではポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(Brown & Levinson, 1987)の使用率が日本語発話より大幅に多いことや、使用する意味公式が日本語と異なることを学び、その社会文化的背景について考察した。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは英語のポライトネスの特徴であるが、日本語では多く使われず、上述の通り高校教科書でもポライトネスは殆ど考慮されていないので、日本語・英語発話の対照分析を通して同ストラテジーを主体的に学ぶ授業デザインは、有意義であると云える。

また、本研究では、談話分析スキルを教える指導デザインが学習者の将来的な語用論的能力習得の伸び率に貢献し得る可能性を示すデータも確認された。授業の中で、語用論研究論文で指摘される日本語・英語「断り」発話の相違点について、学生が自ら分析して発見するケースがあったからである。2019 年度に同指導を受けることで、学習者が 2 つ目のスピーチ・アクト分析を自力で行える能力を習得できているか追加調査を行い、応用力の程度を検証するつもりである。

## 3. 日本人の「断り」表現についての先行研究とは異なるデータ

Takahashi & Beebe (1987)以降の日本人の「断り」スピーチ・アクトの先行研究では、目上の人(教授など)への表現の方が、同等の人(友人など)よりも多く相手のことが配慮されるために、より丁寧な言い回しになり、使用される意味公式の数もより多くなることが指摘されていた。しかし、本研究が日本人大学生から質問紙、roleplay で収集した発話データでは、その逆になっているケースが少なからずあった。フォロー・アップとしてインタビュー、自由記述で認知を調査した結果、目上の人であっても教授の誘いを断るのは簡単で、心的負担も感じないが、友人には断り難く、心的負担も大きいとの回答が複数あった。日本の社会構造の変化と共に、人間関係の上下関係における若者の意識や配慮の在り方が変わり、言葉の使い方も変化した可能性がある。2019 年度に、上下関係に親疎関係を加えて、再調査する予定である。本報告書の「研究発表」の欄に記した通り、2019 年 6 月に学会において研究成果を口頭発表する予定である(採択済み)。

## 研究成果の概要 つづき

## 4. より深い学びを促す授業デザイン

本研究の授業デザインのもう一つのねらいは、学生が単に英語によるスピーチ・アクトに使われる意味公式の内容・順番・使用頻度を日本語のそれと対照分析するだけでなく、コミュニケーションには情報伝達の機能だけでなく、対人関係上の機能があること(Brown & Yule, 1983)を理解し、文化によって特有の人間関係(例えば、教師と学生の社会的なありかた)、対人配慮の在り方、ポライトネスやスピーチ・アクトの方法があることを理解することであった。自由記述では、「断り」表現における英語母語話者と日本人の配慮やストラテジーの違いを始めて学んでいるにも拘らず、英語母語話者の人間関係の在り方や心的態度を読み解こうとした考察も多くあり、それらの解釈は異文化コミュニケーション学の知見に沿うものが多かった。語用論や談話分析の知識が留学やグローバル・ビジネスに役立つとする声が多々あり、上記の授業のねらいは達成されたと考えられる。

## 5. 本研究の成果

本研究では、「談話分析を用いた語用論指導」の授業デザインを考案、実施、調査した結果、その有効性が実地検証された点が第一の研究成果である。世界的に語用論指導の方法がまだ確立されていない(Rose & Kasper, 2001)なか、本研究は、日本人学習者に対する語用論指導デザインの一成功例を提示し得ることが明確になったので、語用論指導研究へ向けて一定の研究成果があがったと云える。

また、本研究で、「断り」場面における現代の若者(調査協力者)の認知を調査した結果、代の若者たちは、特に目上の者との対人関係において、過去半世紀に中根(1967)らが提示したタテ社会を重視するという日本人社会論とは異なる認識を持っていることが確認された。そのことが彼らの「断り」場面の言語表現に反映されていることも、調査協力者へのフォロー・アップ・インタビュー等により確認された。この調査結果は、日本人語用論の先行研究で広く知られている日本文化論、日本人語用論の知見と異なるものであり、本研究の研究成果であると云えるであろう。

なお、本研究の成果は、2019年度に学会で口頭発表をする(採択済み)ほか、今後、追加調査とデータ分析を実施し、その結果も加味して、学会や大学の紀要に投稿する予定である。

## 【参考文献】

- Brown, P. & Levinson, C. L. (1987 [1978]) *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 村田 泰美 (2006) 「第7章 高校のオーラル・テキストに見られるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」. 堀素子他『ポライトネスと英語教育: 言語使用における対人関係の機能』. 東京: ひつじ書房. 144-160頁.
- 村田 和代 (2006) 「第8章 高校のオーラル・テキストに見られるFTAの1例: 「不同意表現」の扱い」. 堀素子他『ポライトネスと英語教育: 言語使用における対人関係の機能』. 東京: ひつじ書房. 161-171頁.
- 中根千枝 (1967) 「タテ社会の人間関係: 単一社会の理論」 東京: 講談社.
- Rose, K. R. & Kasper, G. (Eds.) (2001) *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takahashi, T. & Beebe, L. M. (1987). The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*. 8 (2), 131-155
- 文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」平成26年9月26日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm)

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**④ 学会発表**

研究発表題目：対人葛藤場面における日本人の認知と「断り」のスピーチ・アクト (予定、採択済)

学会名：日本英語表現学会

大会名：日本英語表現学会第48回全国大会

開催日：2019年6月29日(土)・30日(日)

会場：活水女子大学東山手キャンパス

発表形式：口頭発表(個人)